

編集後記

<丸山 雅一>

症例報告というのは、原著論文や綜説よりもずっとやっかいなものだと思う。文献を調べたらきりがなく、自分の症例が本当に価値があるのかどうか不安にかられながら一文をまとめる作業は辛いものである。限られた紙面のなかで、まず具体的事実を正確に記載すること、この事実に基づいた症例の位置づけに1つの自己主張を託すこと。こういったことを先輩に教えられて、初めての症例報告に挑戦したときのことを思い出す。

本号に掲載されている症例は、これは見てくれ、といった著者の自信作ばかりである。1つ1つの症例は、われわれが日常の診療で悩み立ちどまったときの道しるべの役割を果たしてくれるであろう。個人的な興味としては潰瘍性大腸炎に多発癌を合併した1例を報告した辻仲論文にひかれた。

研究欄の西俣論文は噴門部早期癌のX線診断の限界を追求した見事なものだが、欲を言わせてもらえば、同様の所見で false positive がルーチン検査でどのくらいあったのか知りたいものだ。

最後に、すべての論文ではないが英文の summary にもう少し表現法の工夫があって欲しいと思う。

<編集> 早期胃癌研究会